



- 源流部の放射線量測定結果
- 新会員紹介
- 自由投稿「なんて田舎に来ちゃったんだろう」
- 創作「天の神様だけが知っている」
- ◆連載 白子川現代史④(最終回)
- ◆連載 源流探歩⑤
- 定例活動報告

白子川な風景 8

ここに住む。



白子川を高い所から見たかった。
折よく大泉学園駅北口近くに住む
会員宅の窓から撮影できた。

大きな都市の姿に
小さな私は圧倒されかけたが、
よく見れば、どっこい、
白子川の位置だって
北野神社や妙福寺の緑だって
家の庭木だって、わかった！

もう、これ以上の都市化はいらない。
守るべきものはなんだろう…

この町で
みんなと共同の支えをさがし、
自然と人間の治まり方を
紡いでいこう。

(写真・文/菅沢 博)

定例活動報告

12月 1月 2月 3月 4月



4月定例日、アオミドロの除去作業を、源流に遊びに来ていた子どもたちが大人用のつなぎを着て手伝ってくれる

源流域・水の測定データ

測定地点	日 天気 気温℃ 項目	12/28	1/25	2/22	3/22
		天気	☀	☀	☀
気温	項目	5	9	6	23
源流部	水温℃	13.9	13.4	10.4	19.3
	水深cm	26	8	4	11
	pH	8.0	7.8	7.4	8.0
井頭橋	水温℃	7.3	8.6	9.3	19.3
	水深cm	33	25	21	21
	pH	8.3	8.0	7.4	7.5

※このほか、透視度、電気伝導度、COD、川幅、堰の流量などを測定している。pHは水素イオン指数で、pH7が中性、これより大きいとアルカリ性、小さいと酸性を示している

白子川源流域と生きものの様子

川掃除、15年目の課題は…

変わってきた源流域の水環境

今から15年前に川掃除を始めたときは、源流を覆い尽くす緑のじゅうたん、外来種オオフサモの刈取り作業が中心だった。その後、夏冬の水涸れに頭を悩ませることに。水の流失を防ぐために井頭橋の下手に堰を築いたり、干上がる水辺の生きものたちの救出にバケツリレーで水を運んだり、水たまりと化した源流の泥の中に潜って身を守っていたホトケドジョウを、下流の水辺に移動させたりもした。

源流域の植生は、当初、杭で囲んだサークルの中に植えられていたカンガレイが繁殖して、5年もたつとオオフサモにとって代わる勢いに達してきた。夏場には人の背ほどにもなるその刈取りに明け暮れることに。植生の変化はカンガレイにとどまらず、背の高いガマ、ウキヤガラも勢力争いに加わってきた。

10年もたつと源流域に泥がたまり、水質が悪くなりはじめた。水の浄化のためにあれこれと試行錯誤することに。ポンプで酸素を送り、源流の水をかくはんしたりもした。しかし、月に一度の活動ではあまりいい効果はえられなかった。

川活動から14年目の昨年のこと、毎年水涸れになる冬場の源流域に珍しく水があった。これを単純に喜んでいいものか、このことがアオミドロの大繁殖を招いているのではないかと専門家の指摘もある。15年目の今、源流域はドロドロのアオミドロでいっぱい。繁殖したアオミドロはへrod化して、湧き水の水環境をどんどん悪化させている。そして、そのアオミドロは井頭堰を越えて下流にまで広がろうとしている。

きれいな湧き水の川をここに残したい。清流に棲むホトケドジョウ、そこに生育する貴重なカワモズクを守りたい。今、私たちにできることはいったい何だろう。

(東谷貞子)

活動記録

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 1 / 24 運営会議 | 3 / 21 運営会議 |
| 25 定例活動 | 22 定例活動 |
| 2 / 8 焼印作業 (みどり広場にて) | 4 / 1 焼印作業 (東谷宅にて) |
| 22 定例活動 | 25 運営会議 |
| 3 / 6 TOTO 助成金授与式 | 26 定例活動 |

新会員 紹介

西東京市東町在住
岡野武琉 (中1)

生き物への興味と水辺の会

僕が生き物に興味をもつようになったキッカケは、富山県にキャンプに行った時、鮎魚女(アイナメ)を釣ったのと、テレビ朝日の黄金伝説という番組を見て、生き物に興味を持ち始めたこと。今はタナゴ釣りや、手長蝦(テナガエビ)釣り、溪流釣りが好きです。

一昨年になるまで、白子川源流・水辺の会があることは知りませんでした。ある時白子川に魚を捕りに行ったら、井口さんに会って水辺の会に来るように誘われました。そして毎月行くようになり、源流まつりで岡崎さんに「会員になったら」と誘われて会員になりました。僕は、「この白子川に多種多様な生き物が生息して外来種がない川になれば良いなあ」と思っています。よろしくお願いします。

測定結果発表!

少しずつ下がってきた!? 源流部の放射線量

白子川源流・水辺の会では、2012年12月から毎月、白子川源流部の放射線の値を測定してきました。

測定箇所は、①最源流部の泥 ②木道上 ③下水ばけ ④井頭橋下の堰(せき) ⑤井頭公園内砂場の5か所。それぞれ水面・地面から5cmと1mの所で測りました。使った計器は「ガイガーFUKUSIMA LCD タイプ」(三和製作所)。単位は、1時間あたりの空間線量、マイクロシーベルト($\mu\text{Sv}/\text{h}$)。国や都の除染基準は $0.23\mu\text{Sv}$ (年間に換算すると1ミリシーベルト)です。

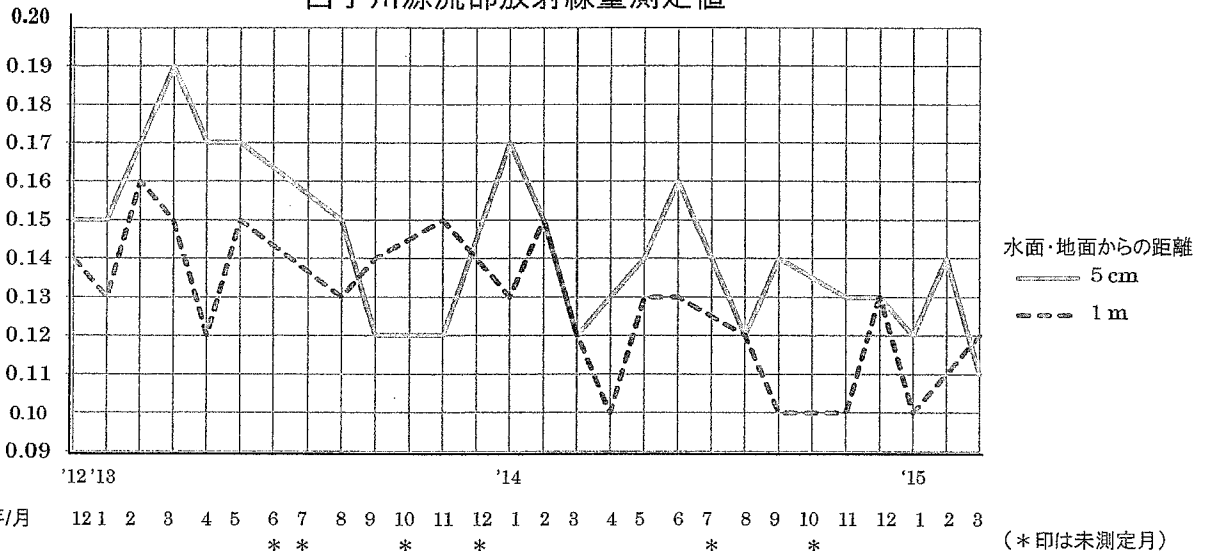
今回、その線量を初めてみなさんにお知らせします。

下のグラフは、5か所の測定値の月ごとの平均値を、5cm(実線)と1m(点線)に分けて表したものです。測り続けてわかってきたことは、5か所の地点の測定値の間に大きな差が見られないこと、そして、5cmも1mも、ジグザグはありながら少しずつ下がってきており、いずれも $0.19\sim 0.10$ の間で推移していること、です。測定期間中は基準を超える平均値はありませんでしたが、これからも計測を続けていきます。

(東谷 篤)

単位: $\mu\text{Sv}/\text{h}$

白子川源流部放射線量測定値



自由投稿

なんて田舎に きちちゃったんだろう

——懐かしきあの頃の大泉学園

横山シヅヨ
(東大泉1丁目在住)

終戦から2ヶ月後、裸電球がたったの3つ、心細く灯る大泉学園駅のホームに降り立ち、両親と共にこの地で私は新たな生活を始めることになりました。

幼少期を過ごした小岩で3月10日の東京大空襲を体験し、川の向こう側が真っ赤に燃えているのを震えながら見ていました。涙を流している大人たちのそばで、石蹴りをしながらまだ理解のできぬまま玉音放送を聞いたのは、疎開先的那須塩原の山の中の温泉地でしたが、この大泉はそれ以上に田舎だと当時の私の目には映ったのです。

大泉学園駅南口の富士街道へ向かう道路は樫の木の枝が大きなトンネルを作り、昼間でも薄暗い中を歩くと時折イタチが目の前を横切ることもあり、驚きました。枝のトンネルを越えると遮るものがなくなって、晴れた日には一面の畑の向こうにそびえる富士山を独り占めしながら家路についたものです。また、大雨が降ると南口の現在の消防署付近は水が溜まりやすく、近くの農家の軒先に小舟が吊り下げられているのを見かけました。

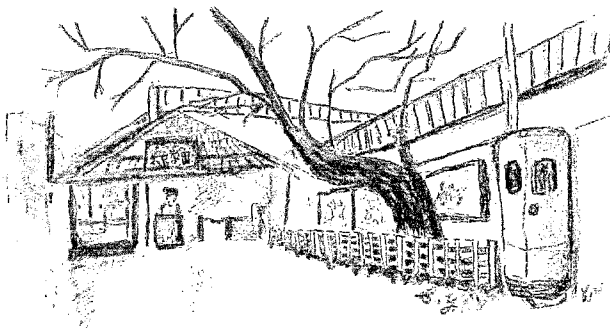
食べ物が不足してお米が貴重な時代でしたが、小学校の同級生は農家の家の子が多く、お弁当箱には銀シャリがつまっているのを横目に見ては羨ましく思い、いわゆる大根飯を混ぜご飯だと強がって言ったことが懐かしく思い出されます。

石神井小学校からの帰り道に通る三宝寺池では、鶏冠の赤い水鳥にあだ名をつけてからかう歌をつくっては、友達と一緒に歌ったものです。

そのうちに北口には小さな映画館ができ、今の南口駅前ロータリーのあたりにできた市場はいつも混雑していて活気に溢れ、だんだんと町は賑やかになっていきました。

この界限に暮らし始めて10年ほどして保谷に出掛けた際、はじめて通りかかった白子川はすでに生活排水が流れていたの、今、ホトケドジョウが元気に泳ぐ美しい流れになっていることに感動しています。

時代の流れのなかで消えていくもの、生まれていくもの、町は目まぐるしく変化していきますが、町並みや顔ぶれは変わっても、川に集まる人や小さな生き物、植物との出会いの楽しさは変わらないで続いてほしいと願っています。



挿し絵/横山シヅヨ

源

流

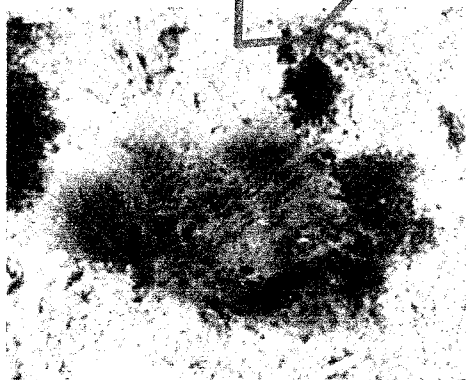
探

歩

⑤

岡崎一成

カワモズク



“カワモズク”ってご存知ですか？
川にいる海のモズクそっくりの藻類（植物）です。カワモズクは湧き水などのきれいな水のところにいますが、数がどんどん減っています。その貴重なカワモズクが白子川に生息しているのです！

カワモズクを研究されている白子・大坂湧水林保全の会^{注1}の須貝郁子さんが源流のカワモズクを調べられ、カワモズク研究の第一人者である国立環境研究所客員研究員の熊野茂先生に同定^{注2}を依頼されました。

その結果は…

紅藻綱 カワモズク目 カワモズク科 ニホンカワモズク

紅藻綱 カワモズク目 カワモズク科 カワモズク

（どちらも環境省レッドデータカテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類）

珍しい2種類の混生であることがわかりました。

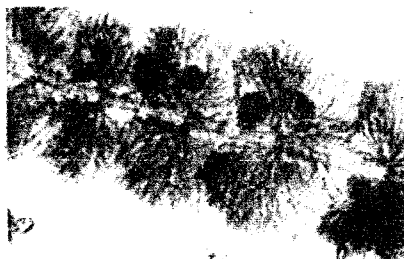
白子川の下流域では、ニホンカワモズク、アオカワモズク、チャイロカワモズクが確認されています。ニホンカワモズクとカワモズクの混生である源流部は固有な特徴を持っています。

貴重なカワモズクが失われないように源流の環境を大切にしたいですね。

※須貝さんは源流のカワモズクを標本として国立科学博物館に収蔵する手続きをされています。

注1：埼玉県和光市本町31-9-603
和光市ホームページわいわいネットに“カワモズクニュース”を掲載しています。

注2：生物を調べ、分類上の所属や種名を決定すること。



藻体(100倍)

須貝さん撮影

天の神様だけが知っている

池田 正

3月下旬、白子川源流の地にも春がやってきた。川沿いのサクラは開花し、花見の人たちも集まり、暖かい空気が漂いだした。中でもうれしそうなのは、アズマヒキガエルであった。源流にある1つの石に座わって水面を見つめて、にこにこしていた。水の中に、自分の生んだ子どものオタマジャクシが元気よく泳いでいたからである。

2月に雨が多く水かさが増し、カンガレイやヒメガマ、その他水生植物の島が水の下になってしまっていた。アズマヒキガエルが冬眠に入っているその増水の増水。仲間たちが冬眠から目を覚まし、土の中から出て、「クオン・クオン」と鳴いて春を告げ、そして、カエル合戦という年1回の大イベントが催される啓蟄(けいちつ)の日が間近に迫っているときである。

しかし、石の上に座っていたアズマヒキガエルはしぶとかった。何億年前を祖先に持ち、あらゆる困難をくりぬけてきたDNAの遺伝子があるらしい。水かさが多くなったときでも何処かに身を潜め、時機のくるのを待っていたのである。そして、自然の神の「時は今だ!」との号令によって「クオン・クオン」と鳴いて自ら鼓舞し、カエル合戦に出陣した。その死に物狂いで恋人を得た愛の結晶のオタマジャクシが、元気に自分の目の前で1万匹以上が泳いでいるのである。

ひとりでのぼろがゆるんでくるのも当然である。多分恋人は合戦に疲れ、2回目の眠りのためにどこか

に姿を隠しているはずである。

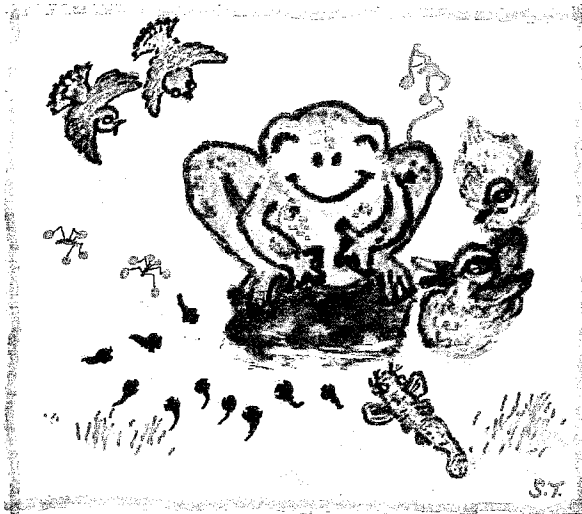
友だちのホトケドジョウやカルガモの連中も自分たちの住んでいる源流でカエルが産卵し、2世のオタマジャクシになって、あちこち動きまわっているのを見て、アズマヒキガエルを祝福しに集まってきていた。さらに、今年生まれた小さなアメンボウもオタマジャクシの泳いでいる水面の上を、祝福するかのよう、いかにも軽やかにウォーター・スケーティングをしていた。

また、幼い男の子や女の子たちが親に連れられて素足で水の中に入り、小さな黒いオタマジャクシを素手で捕えようと一所懸命になっていた。やがて女の子は顔が泥だらけになって、小さい手の平によるやく捕えた1cm程のオタマジャクシを親に見せながら、「わたし、オタマジャクシが大好きなんだ」と、うれしそうに話した。

まさに、源流は、ヒトを含めた生きものたちの天国である。ヒメガマやカンガレイの植物たちも5~6cm程の新芽を出していた。

そこへキジバトのペアがやってきた。このペアはいつも仲が良い。彼等は源流近くの農地・公園・憩いの森、そしてヒトが住んでいる庭にやってきて、ゆうゆうと餌探しをしている生きものである。

「おいカエル君、いつまでニヤニヤしているんだ。陸にいるお前さんの仲間たちがGMDSS(SOS)を発信して『助けてくれ』と呼んでいるのを知らないのか。啓蟄だと土から出てきたが、恋人探しの池、沼は無し。源流近くまでいくが、まわりには固い岸壁。一休みする公園には樹木が少なく、天敵から逃れようと土に潜り込みたいが、土が固くて困っていた。おい、どうする」。キジバトに言われて、ヒキガエルは天を仰いで溜め息をついた。「クオン・クオン」今は絶望の青息吐息に変わっていた。これからどうなるか、天の神様だけが知っている。



白子川現代史 (最終回)

ワークショップで 親水公園づくり

1991(H3)年、宮の橋と一新橋の間に設置された浄化装置によって、水質はよくなったと報告されたのだが、どのくらいよくなったのか比較するものがないので数値で確かめてはいない。しかし、従来からの悪臭はなくなっていた。浄化装置というのは箱形の中にすだれ状のカーテンのようなものがあり、そこを汚い水が通ると浄化されるシステムになっている。この頃には保谷市の下水道が完備してきたこともあり、流入してくる水質はよくなったので、浄化装置は撤去されることになった。

1992(H4)年頃には東大泉7丁目周辺の下水道も完備し、私たちもU字溝掃除から解放された。練馬区内でも遅い下水道整備であった。しかし、水洗トイレになるまではまだ時間がかかった。大雨になると白子川上流には汚物が直接流れこんでいた。この頃の下水道は雨水と下水を一緒に流す合流方式が中心で、分流方式の下水道への関心は少数であった。住民にとって、白子川はまだ身近なものにはならず、ビン、カン、自転車などが捨てられて、その度に、はしごを下ろして川のゴミを拾いに降りてくれる人もいた。

これまでに、白子川は大きな「手術」を2度した。1度目は1980(S55)年の公園改修で七福橋からの流れを直線にし、マルバヤナギの木を川面から遠ざけた。大雨のときは七福橋下の土管からのゴォーという濁流の音が怖くて、近隣の住民は眠れなかったという。

住民が白子川を身近に感じたのは、2度目の1995(H7)年の公園改修の時である。この頃、多自然型の川づくりが全国で叫ばれはじめ、親水護岸づくりを東京都も考えるようになった。そして、区内で最初の親水護岸づくりを、この白子川で実践

することになったのである。公園課は地域住民参加のワークショップを行った。5つのグループに分かれて現地を見学し、川に入れること、湧水を生かすこと、防災に使えること等々、いろいろ意見を出し合い、それを参考にして1997(H9)年10月に大泉井頭親水公園は完成した。井頭橋から上流七福橋の源流部をワンド(池のような地形)にして、そこに木道を造り、川に降りられるようになった。これが現在の源流の風景である。

しかし、七福橋下の排水溝は、その上をコンクリート張りにし、大雨が降ると下水からあふれた生活排水を、源流部を迂回し、井頭橋手前の下水ばけから流れ出るようにした。源流部を迂回させたとはいえ、合流式のために湧水の川に下水が流れてくるのだ。川底にはバラス(小石や砂利)が敷き詰められ、固められ、ナガエミクリやヒメガマなどの水草が植えられ、結果としては、湧水の川のイメージとは違う白子川源流になったのである。

それにしても、いったい湧水はどこから出てくるのだろう。ワークショップに参加した人たちは、よくなった、きれいになったと喜んでいるのだが…。次はホテルを飛ばしたい、と言う人もいた。雨が降らないと川は干上がり、「湧水保全条例を制定せよ」という陳情を提出したりした。川が川になるためにはまだまだ時間が必要だった。

2007(H19)年、練馬区都市マスタープランで白子川源流一帯は環境保全地域として位置付けられた。白子川はやっと市民権を得たのであった。

こうして、あの汚れた白子川は、地域の人々に少しずつ親しみと関心を持たれて、「みんなの白子川」になったのである。しかし、都市化の中で、真の川としてよみがえらせるためには、これからも一人ひとりがこの川と向き合っていかなければならない。



ワークショップ風景
5つのグループに分かれて計画案づくり(1995年)

カワニナ

カワニナは、源流部には見られないが、中島橋あたりと比丘尼調節池付近にかけ生存している。

軟体動物一腹足綱に属する淡水産の巻貝の1種で、円錐形で長さは3cmほどになる。本来のからの色は白系統であるが、鉄分を付着することにより、黒っぽい。

落ち葉や藻類等を食べる。天敵は蛍の幼虫やコイなどである。



これからの活動予定

- 5 / 10(日) 東映裏の河川整備エリアにてアコ放流
- 18(月) 大泉南小学校4年の源流見学
- 24(日) 定例活動
- 6 / 7(日) 身近な川の全国一斉調査
- 14(日) 第15回定期総会
- 28(日) 定例活動
- 7 / 12(日) 映画上映会『柳川堀割物語』
- 26(日) 定例活動

※運営会議は定例活動の前夜です

定期総会のお知らせ

6月14日(日) 午後1時30分～
東大泉地域集会所

この1年を振り返り、新たにスタートする大切な場です。
会員のみなさま、ぜひご出席ください。

身近な川の全国一斉調査

参加者募集 !!

- 6月7日(日) 9時～12時 雨天決行
- 大泉井頭公園集合、動きやすい服装
- 川に入って水質・生物・植物等調査
- 申し込み先：菅沢 03-3923-8430

定例活動 毎月第4日曜 午後1:30～

編集後記

▼驚いたことに、ネオニコチノイド系農薬によって減っているミツバチが、うちのカナメの花にブンブンと群がったのは去年の5月。今年も同じように来ることを祈るばかりです。(ひ)

▼源流にたまった泥をどうする？ 逆手にとって、田植えをしてみないか？ 考えてみれば、これまで「刈る」ことはあっても、「植える」ことってあんまりなかったからね。もし米、実ったらどうする？(あ)

▼川のフェンスに何やら人だかり。見ているのは、日向ぼっこする親子のカルガモ。1、2、3...と、生まれて間もないヒナは9わ。数日後、親ガモが連れていたのは6わ。川見る人は皆数えてるぞ。(さ)

▼戦後、横山シズヨさんの子ども時代は、ゆったりと時間が流れている。TVもPCもないシンプルな生活。日頃、時間に追われていると感じるのは、きっと、これらの誘惑に負けているということだろう。(け)

どなたでも 川にはいれます！

発行 白子川源流・水辺の会
 編集 東谷 篤/東谷貞子/菅沢恵子
 題字 宮本沙海
 発行部数 1,300部
 代表 菅沢 博 03-3923-8430
 練馬区南大泉 1-10-5
suga-lohas@jcom.home.ne.jp
http://www.geocities.jp/sirako_river/
 ※この会報は年3回発行しています

当会はTOTO水環境基金の助成を受けています